

【アオギリとは】花言葉：秘めた意志、秘めた恋

アオイ科アオギリ属。中国・東南アジア原産の落葉高木（10～15メートル）で古くから日本に渡来し自生する。

葉が大きいので心地よい緑陰をつくり、英語ではパラソルツリーと呼ばれる。

中国名・梧桐（ごとう）、和名・青桐。本来「桐」といえば本種のこと、中国では聖王が出現する瑞兆として鳳凰が止まる唯一の木とされ神聖視される。

枝先に30～50cmの枝分かれした花の茎を出し、6～7月頃、黄色い花を数多く咲かせ、花の後には長さ8センチほどの舟型をした果実ができる。その縁に1～5個の丸い種子が生まれる造形は神秘的である。

スクスクと成長し大きな葉っぱが広がる樹形は生命力に溢れ、爽やかな緑色の樹皮は、シラカバ、ヒメシャラと並び三大美幹木に数えられる。



個体によって葉の裂け方は多少異なる 葉の裏面には毛があり、白っぽく見える
雨に濡れた若木の幹の緑色を見れば命名に納得する
実は幹でも光合成を行うため緑色になっているのである

・帰るは嬉し梧桐（ごとう）のいまだ青きうち

夏目漱石



冬芽の様子



アオギリの新芽は赤みを帯びる



暑さが厳しくなり始める6～7月になると花卉のない黄色い花が房状に垂れ下がる

一輪一輪は小さいが、円錐状に集まり、開花期には遠目からもよく目立つ。花には蜂が集まり、愛媛県南予地方では採蜜した純粋ハチミツが黒糖に似たコクのある蜂蜜として「アオギリはちみつ」という名前で市販されている。



花の後には長さ8センチほどの5本のさや（心皮・花葉）が垂れ下がり、8月のおわり頃からさやの内側が1枚ずつ縫合線に沿ってばらばらに分かれて船形になり、その皮の縁に1～5個の種子ができる。10月頃に熟せば炒って食べることができる。一年で最も目立つのは実がたわわになるこの時期ともいえる。



さやが裂けて実が現れる造形はなんとも神秘的



実は熟すとコーヒーの代用にもなる

【アオギリ】 中国名・梧桐（ごとう）、和名・青桐。本来「桐」といえば本種のことで、中国では聖王（徳のある優れた君主）が出現する瑞兆として鳳凰が止まる唯一の木とされ神聖視される。

中国から日本へ、この「鳳凰」の伝説と「桐」の字が伝わった時、どこかで取り違えが起きました。アオギリではなく、以前からあった「キリ」の木のほうに、「桐」の字を当ててしまいました。

字の取り違いのため、日本では「キリ」の木を「桐」と呼ぶようになり、おかげで、アオギリのものだった伝説も、すべてキリにまつわるものとしてすりかえられてしまったのでした。

その結果日本では、本来のアオギリではなく、「キリの木に、鳳凰が住む」といわれることになりました。中国でアオギリが尊ばれるように、日本では、キリが尊ばれることになったのです。

「桐一葉」という季語も、本来のアオギリでなく、「キリの葉が落ちる」と解釈されています。

【桐紋】

日本では嵯峨天皇の頃から天皇の衣類の刺繍や染め抜きに用いられるなど、「菊の御紋」に次ぐ高貴な紋章とされ、中世以降は天下人たる武家が望んだ家紋でもあり、足利尊氏や豊臣秀吉などもこれを天皇から賜っている。このため五七の桐は「**政権担当者**の紋章」という認識が定着することになりました。

ところが、「桐」の字の取り違えから日本で桐紋が使われるのは、鳳凰の伝承に倣ったものにもかかわらず、桐紋としてデザインされているのは**別種のキリ（白桐）**なのです。

「**キリ**」の木とは、女の子が誕生すると住居の周辺に桐を植栽し、結婚が近くなるとその桐を使って花嫁道具をあつらえるという風習のある木で、一般的にはこの木のほうがよく知られており、全国的に分布している。家具材、下駄材、楽器材、箱材など幅広く用いられる。漢語の別名として白桐（シロギリ）、泡桐、榮。



五七の桐

